

《書 評》

増永理考『ローマ帝国を生きるギリシア都市
——小アジアにおける文化・経済のダイナミクス——』

京都大学学術出版会、2024 年、368 頁

新 保 良 明

I

増永理考氏はこれまで帝国東部を検討対象に据えつつ、当該諸都市の多面的な有り様をテーマに数々の論文を公にされてきた新進気鋭の研究者である。そして本書は「あとがき」に明示されているように（253 頁）、氏が 2019 年、京都大学大学院文学研究科に提出した博士論文「ローマ帝政前期小アジアにおける都市社会の研究 — 都市による文化資本運用をめぐって」（主査：南川高志教授）に加筆・修正を施したものであり、言わば、このたび満を持して上梓された初の単著ということになる。

拙評にあたり、先ずは本書の特徴を挙げておこう。帝国東部を主たる研究フィールドに設定してきたがゆえに、氏はディオオン・クリュストモス『弁論集』やプルタルコス『モラリア』、パウサニアス『ギリシア案内記』などの文学史料、『学説彙纂 *Digesta*』などの法文史料はもとより、小アジア出土のギリシア語碑文等を大量かつ縦横無尽に扱った。確かに、文学、法文、碑文といった史料を有機的に、相互補完的に駆使する研究スタイルは西洋古代史にとって特段珍しくない。情報量が限られているという史料状況がこのような研究手法を不可避としているからである。しかし、碑文や貨幣に関する限り、氏は自ら課題設定したテーマに沿う事例を、碑文集などから丹念に逐一拾い上げていくという極めて地道な作業をこなした。例えば、その結実が第三章の「表三—：エフェソスにおける建築物奉納碑文、表三—二：エフェソスにおける建築者顕彰碑文」（73～80 頁）であり、1200 点以上の貨幣を列挙・分類した第七章の「註 32・35・36」（265～267 頁）である。従って、本書は増永氏の多大な時間と集中力を前提とした労作・力作であると認めざるをえない。そして著者が取り上げた多種多様な碑文が各章で本文や註、表に余すところなく提示され、もちろんのことながら、データとして行論に十二分な説得力を与えることに資しているわけである。さらに、氏はトルコの現地を訪れ、碑文そのものを確認した上で（127～140 頁）、それらに基づき立論した箇所もある。かくして、本書は実に多面的な研究手法に基づいていると言えよう。

他方、もう一つ本書の野心的な試みにも言及しておきたい。それは管見の限り、本邦では

例がない都市発行貨幣の図像分析にある。この分野については、そもそも先行研究がほとんどなく、貨幣そのものについても比佐篤『貨幣が語るローマ帝国史 ― 権力と図像の千年』（中公新書、2018年）が挙げられるに留まるであろう。ただし、当該書は地方都市発行の貨幣ではなく、ローマ政府発行の貨幣を取り上げているため、増永氏の研究とはベクトルを異にしている。それゆえ、氏は我が国において未開拓な分野に対し果敢にチャレンジしたわけであり、この点でも本邦学界への貢献度が高いと言わねばなるまい。

Ⅱ

拙評を提示する前に、先ずは本書の各章を確認しておこう。それは次の構成を取っている。

序章 ローマ帝国のなかのギリシア

第一章 たそがれのギリシア都市？ ― 学説史とその問題

第二章 小アジアにおけるギリシア都市の広がりと構造

第三章 公共建築物と都市 ― エフェソス、プルサの事例

第四章 祝祭と都市 ― アフロディシアスの事例

補論 アフロディシアスにおける劇場の動態的観測

第五章 コイノンにおける恵与と都市 ― リュキアの事例

第六章 公共建築物から祝祭へ ― 「文化資本」としての恵与

第七章 公共建築物と祝祭の表象 ― 都市発行貨幣における図像分析

終章 ギリシア都市からローマ帝国支配をまなぐ

これらを踏まえ、以下では、各章の骨子を概観してみよう。

序章では、ローマ帝国下でギリシア人はいかに生きたのか、ローマ帝国政府に隷属しただけであったのか、という本源的問いが発せられる。確かに、帝国東部は悉くローマの属州にされ、皇帝や元老院から派遣された属州総督の統治下に置かれた。かかる状況を踏まえ、これまでの諸研究は帝国政府による統治政策を検討対象としてきた。そして、ローマは支配下に置いた地域に対し、ローマ風の各種システムや風習を導入してきたとされる。かような現象は研究史上、〈ローマ化〉と称されてきた。つまり、帝国各地がローマと同一、もしくはそれに準じる様相を呈したというわけである。が、増永氏は「西方とは異なる、東方ギリシア語圏に特有なローマ帝国支配の構造が想定される」として、「本書では、ギリシア人自身の観点から、ローマ帝国下において彼らが形成する社会の実態を分析していく」と声高らかに宣言し、ギリシアの独自性に注目する。従来と異なる視座の提案は斬新にして、頗る魅力的なものと言えよう。では、かかる研究姿勢は何に拠っているのか。それは次の点にある。即ち、ギリシアに代表される東方は都市文明の先進地帯であっただけに、ローマ化の影響は少なく、「西方に比べて、ローマ支配は、文明の点で彼らに勝るとも劣らなかったギリシア

人の社会を大きく変質させたわけではなかった」というのである（確かに、西方の都市建設がローマ政府主導で上から行われた事例を Tac. Agr.21; Ann.11.19 が証言している）。かくして、氏は〈都市の自治〉と〈都市に対する名望家支配〉（拙著『古代ローマの帝国官僚と行政 — 小さな政府と都市 —』ミネルヴァ書房、2016 年、6～8 頁も参照）を特徴とする「一元的に構造化されたローマ帝国の姿」がそもそもギリシア都市に現れるのか、そうではなくて「西方とは異なる、東方ギリシア語圏に特有なローマ帝国支配の構造」が想定されるのではないかという骨太にして、根源的な疑問を提起し、ここに本書の座標軸を明確に定めたのであった（上記「」引用は本書 6～7 頁）。

これを受けて、先ず第一章は〈ローマ支配下のギリシア都市の衰退〉という定説に関して、研究史を丁寧に繙いた上で、近年、支持を集めている「古代末期」学派もこの衰退を否定していないとする（23 頁）。ただし、氏はかかる衰退に疑義を呈し、その指標として、都市財政の健全化とエヴェルジェティズムの二つを強調する。以下の行論で重要となるため、「エヴェルジェティズム」について簡略に触れておきたい。これはフランス人研究者 P・ヴェーヌ（鎌田博夫訳『パンと競技場 — ギリシア・ローマ時代の政治と都市の社会学的歴史』法政大学出版局、1998 年）が用いた造語であり、西洋古代史に特有の概念である。端的に言えば、各地の富裕者（皇帝を含む）が死後まで名声が残ることを望み、存命中や遺言で都市民に金銭、食糧、見世物、インフラ整備などを私費で恵与し（受益者は不特定多数であり、特定団体のメンバーではない）、この事実を碑文に残そうとした現象である。従って、あくまでも自己の名声を求めての寄付行為であって、キリスト教徒が死後の〈救済〉を得る要件としての〈善行〉とは明らかに性質を異にした。そして増永氏は「共同体メンバーとの交渉などを経て有力者らによってなされる恵与が人々に受容された上で、その恵与されたものが維持され、それによって共同体に利益がもたらされる」（28 頁）と強調したのみならず、かかる点の観察により、ギリシア都市社会を動態的に観察することが可能になるという本書における分析の方向性を明示した。

第二章は本書で展開される検討を理解していく上で大前提となる都市関連の諸構造を確認する基礎作業という任を果たしている。ここでは、属州内で諸都市がコイノンと呼ばれる上部組織を結成し、一体感を共有しながらも、互いに都市間の序列を強く意識していたことが指摘される一方で、都市内では評議会や民会が機能し、自治を担っていた点が確認される（拙稿「ローマ帝政前期における都市民会と民衆に関する一考察（1）」『東京都市大学共通教育部紀要』16、2023 年、7～13 頁；同「ローマ帝政前期における都市の政務官・参事会・民会 — 自治の諸相 —」『歴史学研究』1054、2024 年、156 頁以下も参照）。さらに、氏は長老会、若者組、「職人たち」といった都市内組織の存在とその活動にも注目する。かくの如く、東方には、いわゆる古典期から連綿と続く自治の伝統があったことが十二分に再確認されるのであった。

第三章は公共建造物の恵与碑文、恵与者に対する顕彰碑文に着目し、何に対して奉獻や顕

彰がなされているのかという点を追究している。氏によれば、小アジア最大の都市である属州アジアのエフェソス市に認められる建築物奉納碑文（表三―一：110 例）は奉献対象として「市民団」「デーモス」「ポリス」などを挙げてきたが、2 世紀初め以降、「デーモス」が消え、「ポリス」が専ら現れることになったと云う。他方、建築者に対する顕彰碑文（表三―二：12 例）の多くが「評議会およびデーモス」を顕彰主体としている。以上を踏まえ、氏は「デーモス」の未記載現象と記載現象という相反する事態を析出する一方で、ディオンのクリュソストモス『弁論集』などの史料を見据えつつ、「家族的な人々のつながりを示す『デーモス』から、物質的な空間あるいは国家という側面をより強調しうる『ポリス』という語が好まれるようになった」と解す（87 頁）。これを受けて、建築物奉献碑文と建築者顕彰碑文における「デーモス」という表記の有無を氏は改めて問うた。後者は先述の如く「評議会およびデーモス」を多用していた上に、顕彰碑文は「公的な組織による決議を経て建てられる」（91 頁）。即ち、ここでのデーモスは民会を意味するに他ならず、その機能継続が確認できるというのである。

第四章は 2～3 世紀の小アジアにおいて数多くの競技祭が開催されるようになるという「競技祭の爆発」と形容される現象に着目し、その理由をアフロディシアス市の碑文に求める。ここにおいて、優越をきそう都市間競争、ローマ風競技とギリシア風競技の並存、皇帝崇拜と剣闘士競技といった多面的分析を施しつつ、氏は「皇帝崇拜などによりローマに対して巧みに服従の意を表しながらも、その権威を利用し、自らの都市の名誉に結びつけようとするギリシア都市」（122 頁）という点に鑑みて、ローマとの関係、近隣都市との関係を重視、強調した。なお、氏によれば、都市にとって最重要な事項はあくまでも他都市との間の優劣であり、ローマとの関係はそのために利用されたのであった。

これに続く補論はアフロディシアス市の劇場における具体相を取り上げている。ここでは「筆者自身が行った現地での調査結果を踏まえながら」（124 頁）空間のあり方を具体的に検討すると目的を力強く明らかにしながら、次なる結論を発する。つまり、恵与者の碑文が劇場の舞台に刻まれている事例は特異であるのみならず、祝祭会場としての劇場に碑文を置くことの重要性が確認される、と。のみならず、同市のアーカイヴ壁も紹介され、その背景に都市間競争の存在を氏は再び看取した。

第五章は諸都市の連合的組織であり、皇帝崇拜や属州総督の顕彰／訴追の実行機関となったコイノンを取り上げる。ここで、主史料となるのはロディアポリス市のオプラモアスなる人物の碑文である。増永氏は当該人物が属州リュキアの複数の都市に恵与を行っている事実を受け、その背後には属州内に都市間競争が現存したと断じている。

第六章はエヴェルジェティスムの内容の変化を大胆にも論じ、少なくとも本書の核の一つを成していると感じた。というのも、恵与対象が 2 世紀初以降、公共建造物の提供から祝祭の開催へと劇的に変化したというのである（氏はこれらをまとめて「文化資本」と概念規定して、キータムとする）。そして公共建造物の経済効果も認めつつも、祝祭がもたらす経

済効果にこそ着目する（今日的表現では「インバウンド効果」になろうか）。つまり、外部からの人流は市場の活性化を生み、商人のショバ代のみならず、商品の売り上げ、飲食費など好景気をもたらしたというのだ。

第七章は小アジアの各都市が独自に発行してきた貨幣の図像を考察対象としており、既述の如く、意欲的にして斬新な内容となっている。とはいえ、氏は註に示される貨幣量が「出土量に過ぎず、鑄貨量と一致してはいない」とも論じている（221頁）。冷静にして賢明な判断と言えよう。一方、図像分析からは、建築物（特に神殿）が多く、祝祭は少ないという結論が導出される。のみならず、それら建築物は新築ではなく、既存のそれであった。かようなデータはエヴェルジェティスムを巡って建築物の恵与から「競技祭の爆発」への変化を重視する氏の行論と齟齬を来すように思われるが、氏は貨幣図像の打刻技術の低さを挙げ、そもそも祝祭の図示を困難とみなす。ただし、各地で廃れていた神託が2世紀に再燃した事実を新たに指摘し、この現象と「競技祭の爆発」の間に因果関係を看取した。

終章では、本書のまとめが改めて提示されるのであるが、氏は建築物と祝祭の二つを都市の名誉向上にとって重要視するディオ・クリュソストモスの見解を強調するところから始める。一方、本書が明らかにしようとしたのは恵与対象が建築物から祝祭へとシフトしていく点にあった。ただし、氏は建築物の恵与を全面否定しているわけではないことを再確認する。さらに、公共建築物はそこでの経済活動を通して都市に富をもたらしてもいた（第六章）。他方、2世紀初め、都市の紐帯が低下していく（第三章）中、祝祭は彼らのアイデンティティを強固にする役割を果たすと共に、他からの参拝者の流入はギリシア人としての自己認識を高めるところともなったし、都市に経済的インバウンド効果をもたらしたのであった（第六章）。かくて、氏は「公共建築物および祝祭は、相補的にその文化的価値と経済的価値を高めあう関係にあった」とバランスが取れた図像を提示してくれている（244頁）。そして2世紀前半に顕現した、都市への帰属意識の低下が祝祭開催を通して解消されていくことに資したとする。最後に、氏は本書末尾を事実上、以下のように締めくくる。つまり、「小アジアのギリシア都市自身は、ときにローマを利用しつつ、（中略）ここに筆者は、近年主張されているローマ帝政前期にも持続していたギリシア都市が保持した活力の限界をみる」（247頁）一方で、「ギリシア人社会では、必ずしも帝国の『共犯者（＝自治を担う都市名望家／評者による補い）』を介さない、西方に比べて相当に放任的な都市委任自治が実現していた」のであった（249頁）、と。

Ⅲ

評者は前述の如く、本書を「労作・力作」と高く評価したところではあるが、これは論述内容に異論が一切無いということと同義ではない。以下では、本書に関する率直な疑問点を挙げていくことで、評者の任を果たすことにしたい。

先ず、本書の構成全体に関する疑念から始めよう。本書はタイトル、サブタイトルからして、「ギリシア」と大いにリンクする存在としての「小アジア」を対象としていることは今さら言うまでもない。だが、取り上げられた地域は属州アジア（第三・四章）、属州リュキア＝パンフュリア（第五・六章）、属州ビテュニア＝ポントゥス（第七章）といった小アジア西部に限られている。従って、属州ガラティア、キリキア、カッパドキアという小アジア東部は対象外とされている。確かに本書冒頭の小アジアの地図1～3（vii-viii 頁）は「中西部」「北西部」「南岸西部」と題され、東部を記載していない。即ち、小アジア西部が射程とされる一方で、東部は完全に捨象されているのである。これに対して、増永氏は「小アジア、なかでもその西半は、ヘレニズム期を経て、ローマ帝政期には都市化がいっそう進展し、ギリシア文化が深く根付くこととなった。」と指摘しつつ、「小アジア（特に西半）のギリシア都市こそが本書にとって格好の対象と考えられるのである」と重ねて小アジア西半の分析を強く主張している。とはいえ、「実際、小アジアのギリシア人たち自身も、自らをギリシア人として自認する一方、ローマ人の側も、確かに小アジアに住む人々をギリシア人として理解している。」と概観している（以上の引用は24頁）。つまり、小アジアの人々も自らを、ローマ人も彼らをギリシア人として認知していたにもかかわらず、小アジア東半地域がギリシア化の点で西半に遅れを取っていたと言えるのか。少なくとも、評者はその根拠を本文にも、註にも見出すことはできなかった。かくの如く、評者はギリシアと小アジアの関係性を最大限に重視する本書が結果的に小アジア西半の分析に終始していることに違和感を覚えた次第である。むしろ、東半についても別途検討がなされれば、本書に重層的、多面的、立体的な厚みが生じたのではなかろうか。

第二に、取り上げたいのは第三章におけるエフェソス市の公共建築物についての分析である。増永氏は本章において碑文に現れる「デーモス」の実体に注目したのであるが、評者は2世紀以降の「祝祭の爆発」という現象を取り上げる第四章と絡めて疑問を提示してみたい。つまり、氏によれば、恵与の対象は建造物から祝祭へと劇的に変化したというのであるが、評者は同じく帝政前期のイタリアに着目し、市壁で囲まれ、面積に限りがある都市内に建造物が次々と整備されていけば、やがて建設用地不足に陥り、その結果、恵与は見世物や金品付与に切り変わらざるをえなかった、なぜならば既存の建造物の修復や装飾という恵与行為は新築に比べ碑文でのインパクトに欠けるからであったと論じた（拙著、279頁以下）。ならば、都市化の先端を行くギリシアも同様の傾向を示すと予想されるのであるが、増永氏は奉献された建物について、「水道関連、次いで神殿関連の建築が比較的多い」と述べるに留まる（69頁）。しかし、「表三―一：エフェソスにおける建築物奉納碑文」の110例を瞥見してみた評者からすれば、以下の事実が看取された。つまり、恵与の分類結果は多い順に以下の通りになる。①恵与対象が不明である事例：24（省略）。②対象とその目的が修復・装飾である事例：24（No.19・26・28・35・36・43・46・48・50・51・53・63・69・71・72・75・76・88・92・95・97・102・104・108）。さらに、既存の設備の整備事業も確認され

(No.1・4・5・17・54・59・61・64・93・100・106・107・110)、これらも修復・装飾に類すると判ぜられれば、事例は37を数えることになる。③水道の事例（ただし、新築・修復のいずれかは不明）：10（No.2・11・27・31・32・37・38・62・80・103）。となると、建築物の新築を軸とするエヴェルジェティズムが都市内で進行し、用地不足に陥った結果、新築以外の有力な選択肢として「建築物の修復・装飾」と「祝祭の爆発」に二極化したと考えられないだろうか。

第三に、第六章はエヴェルジェティズムの対象としての「祝祭」提供を組上にあげる。恵与現象について主にイタリアを焦点に据えてきた評者にとって、祝祭の恵与そのものが驚くべき内容であったと先ずは告白しておこう。確かに、ギリシアにはオリュンピア祭を始めとして、ピュティア祭などが知られているが、恥ずかしながら、各都市レベルの祭典について知識は欠落していたからである。管見の限り、帝国西部に関しては、祝祭を巡る研究上の視座はないのではないかと。従って、著者の慧眼を認めねばなるまい。一方、氏は恵与内容が「祝祭の爆発」と言うべき事態に移行した現象に注目し、その理由として祝祭に起因する人流（インバウンド効果）を看取した。祝祭が地元民にアイデンティティやプライドを与える一方で、当市に経済的利得をもたらしたというのである。かかる点は十分に首肯されるに足ると思われるが、金銭的效果はいかほどであったのか。というのも、年間における祝祭の開催数、開催総日数などが不明であるからである。オリュンピアが4年に一度開催であったことは自明であろうが、新たに設けられた祝祭の実態はどうであったのか。オイノアンダ市の名望家がハドリアヌス帝下に創設した音楽競技祭が4年毎の開催を軸とする重要な碑文があるが、本書は当該案件を、祝祭経費確保に関する事例として扱っている（194頁以下）。いずれにせよ、ここでの本祝祭は4年に一度の開催であることが明らかである。このような開催頻度が当市にいかほどの経済的利得をもたらしたのであるだろうか。そしてギリシア世界全体と言わないまでも、小アジアにおける祝祭開催の増加の有無も気になるところである。要するに、本書はL・ロベールの「祝祭の爆発」という刺激的なタームを用いながらも、具体的な数値を示していない（第三章の表三—一・二などのようなリストは提供されていない）。確かに、本書の議論の方向性はわかるにせよ、各市に古くからの祝祭が平均的にどの程度あり、これらに加え、各市にどれだけの祝祭が2世紀以降、新設されたのかを — 概数でも、都市モデルでも — 例示しないと、説得力に欠けるのではなかろうか。祝祭開催数が不明な現段階での感想をあえて述べさせていただくと、市外からの流入が祝祭時にあったことは確実であろうが、祝祭が頻繁に繰り返されれば、インバウンドは減ったのではないかと。というのも、祝祭内容に希少性があればあるほど、集客力は高まったであろうが、特徴がさしていなければ、集客力は減じたに違いないからである。なお、現在の日本において、外国人の訪問先は祝祭期間に限られる特定の観光地というより、浅草、原宿、京都という定番の場所であることも想起したい。

第四に、第七章について言及したい。本章は都市発行貨幣を扱っているという点で革新的

試みであると既に高く評価したところである。とはいえ、氏の企図した研究手法と結論が説得的に連動しているのかどうかは別問題である。ところで、氏は2世紀を境にエヴェルジェティズムの対象が建築物から祝祭へと変化したことを碑文などから確認した上で、このトレンドを貨幣にも見ようとした。一つの歴史事象を複眼的に見ようとする研究姿勢は好感が持てる。ところが、現実には貨幣の図像は建築物の多さ、祝祭の少なさを証言したのであった。これに対して、氏は祝祭の絵柄を貨幣に描くことの難度に、少なさの理由を求めたのであるが、各祝祭のイメージを図像化できなかったからと果たして安易に言えようか。この点に関する実証は困難であろう。ならば、唯一言える点は貨幣の図像が祝祭ではなく、既存の建造物が多かったということになる。祝祭は一過性的であり、建造物は永続的であるという根本的違いがあったのではないか。

最後に、終章にも触れておきたい。「帝国より授けられる諸特権と引き換えに、秩序ある都市委任を任された、帝国の『共犯者』たる地方都市有力者の役割こそ、帝国システムの要であった」(248頁)一方で、「ギリシア人社会では、必ずしも帝国の『共犯者』を介さない、西方に比べて相当に放任的な都市自治委任が実現していたのである」(249頁)、と。しかしながら、かかる東西比較について本文での検討は認められず、評者としては戸惑った。例えば、財政破綻しかねない都市に派遣された都市監督官 *curator rei publicae* について本書は扱っておらず、当然のことながら、その東西比較も認められない。また総督に関しては属州ビテュニア=ポントゥスが財政再建のため元老院管轄属州から皇帝管轄属州へと特別に切り替えられ、その総督に任じられた小プリニウスの事例(弓削達「総督としてのプリニウス(小)」秀村欣二・久保正彰・荒井献編『古典古代における伝承と伝記』岩波書店、1975年)が直ちに想起可能であるが、この事例も取り上げられていないのである。以上から、帝国東部の自治を「相当に放任的」と断じていいのか甚だ疑問と言わざるをえない。

Ⅳ

以上、思うところを率直に述べてみた。もちろん、評者の誤読、誤解の類いが含まれていると思われる。これらについては、増永氏のご寛恕を願うしかない。なお、これまで増永氏の学会発表の司会を依頼され、4回務めつつ、これを不思議に思ってきたが、今回の書評で学術的関心の重なりを今さらながら実感した次第である。他方、増永氏が本書刊行を踏まえて、今後、いかなるテーマと論考に向かうのかを鶴首して待ちたい。